

魯董集

卷之四







骨董集上編下之巻 後

江戸

醒齋輯

勸進比丘尼繪解

下にいづゆる古画その風林をりて時代を考へるは寛永の比抄にありのまゝ  
勸進比丘尼の繪解なる体あざむるべし 東海道名所記 淺井了意作 卷二よ云  
万治中印本

このところ。比丘尼の伊勢熊野にまきまきをほとめ、その赤子みる伊勢  
熊野よまのゝ故に熊野比丘尼と名づけ、其中よ声よく奇をうさひひる  
あめのありて、うさひひて勸進一たり、その赤子まきまきを奇をうさひひたり、よき熊野  
の法と名づみて地ぢに抱坐して六道乃のり根を法よききて、法とたをりて  
ぢくうくたゝし、また女房達のまにまきまきで誤するんどもよく奉るられ、  
後世をまきぬ人のために、比丘尼にあらされて、ぢくうくたゝし、まきまきをりたり、まきまきあり、  
のりまきまきをうさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき  
まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき

まきまき、まきまきをりたり、うさひひる、うさひひて、つは世伊勢よまのれども、行をもせど、中、法よき



完板より  
散木集の  
ちよふ馬の  
蓮芽の傍  
あらざる  
べー

画巻の如き抄をありり  
絵解の花の哥小  
「らん不や絵より日まことふ  
花の紐ごうごうとくわの我まうよと 日速懐の哥よ」後とわく「琵琶ひた  
くふる我をこそとさめつえんたるめううありりれ 判の詞を考ふる小宮元軍治の  
さゆらんと画巻よと。杖のくさくさくつ。絵解の節をつけて。平家うととわく  
かうに琵琶小合せとわされるよやとかわも。杖改し雉の尾つきたるのさびくさ  
あめとく。絵巻の破をとねざる乃め狄比丘尼の絵られも。是等のうけりけるや。

○端午の茅卷馬

著聞集 卷十九 草木部よ云「秦覚法印五月五日人の件」菖蒲をほるつととて

今按するよ。秦覚法印の八十二代 後鳥羽院の御時。文治建久の比の久々當時  
五月五日。茅りて馬を作りまのじりるべ。日本歳時記 貞享五刻 五月五日  
端午小菰の葉をて馬をほくま。近年いたえたり。とて右の茅卷馬のまう

○古画勸進比丘尼繪解圖

柳塘館摹藏



按ざるよ今よりあつて百八十年  
かくり前曾永中よゆける  
絵うえり紙を白紙布よと  
またたつらあつたあり  
七十一番職人冬  
絵を合せらるへ

天機権寫

骨董上編下之後二



あるべし。漢土は五月五日、艾（あ）をちひさき虎（とら）をけくまを、ひよりのくりのり、それを艾虎（あいにこ）と  
 たり。漢籍（かんせき）よあまうこをえたり。和漢相（わかんあひま）似たるるなり。

○端午の頭巾装束小人形

今より凡百二十三年前、延宝天和貞享元禄の比に五月五日、男児紙（おとここゝろ）よこれ  
 頭巾装束（かぶまゝ）を着（き）、山伏（やまぶし）の体（てい）よ出（で）多（た）て扱（あ）び、奉（ほう）のりき。日次紀事（にっしきじ）の延宝五月  
 五日の條（じょう）よ云（い）以（も）柳（やなぎ）木（き）一（いつ）作（つく）大（おほ）小（こ）刀（やいば）是（こゝろ）謂（い）菅（かや）蒲（わづ）刀（やいば）男（おとこ）兒（こ）横（よこ）之（の）  
 於（お）腰（こし）著（き）頭（かぶ）巾（まわし）中（なか）倣（なま）山（やま）伏（ぶし）射（や）云（い）云（い）貞享前（しんかうまへ）小川（おがわ）一（いつ）家（か）端（たん）  
 午（うま）所（ところ）用（もち）木（き）刀（やいば）或（ある）謂（い）菅（かや）蒲（わづ）刀（やいば）云（い）云（い）又（また）木（き）長（なが）刀（やいば）木（き）甲（か）曹（そう）山（やま）伏（ぶし）  
 之（の）頭（かぶ）巾（まわし）装（ま）束（ぶくろ）并（なら）藥（くすり）玉（たま）等（ら）物（もの）賣（う）之（の）云（い）云（い）享保（きやうほう）十（じゅう）六（ろく）七（しち）年（ねん）  
 双（ふた）あまむら、五月（ごご）の初（はつ）とまきん、とちけ、あら、菅（かや）蒲（わづ）刀（やいば）をうりてありく、それを  
 子供（こども）求（もと）めて五月（ごご）四（よ）日（にち）小（こ）子供（こども）求（もと）まうぶまて所（ところ）巻（ま）く、まきんをせり、たまきを  
 物（もの）賣（う）る、菅（かや）蒲（わづ）刀（やいば）をさし、あらを吹（ふ）けりく、云（い）云（い）とあり、それらをえりてすよ、  
 まてて下（した）の古（ふる）画（ゑ）よのとて、今（いま）もなれ、なまされぬべし。

○元禄年中の印本

大和耕作繪抄

卷二小所裁の図あり

土筆の原藏本



○ひく端午（たんご）にをのひん  
 紙（かみ）のこころたのまきん  
 けささうひて扱（あ）びるる体（てい）

○小人形のついで板の巻ものついで元禄のちひさき虎をけくまを、ひよりのくりのり、それを艾虎と  
 人形の割の質（しつ）まをりて、其（その）角（かく）が五（ご）え集（あ）り、さうして、小（こ）人（にん）形（がた）のひよりの  
 けささうひて扱（あ）びるる体（てい）

骨董上編 下之後三



古事記白  
棟原宮殿  
宇波那理  
大和物語  
又梅垣  
兼平  
古昔  
前妻と云る

○後妻打古図考 四

和名鈔 後妻 和名宇波余利 新撰字鏡

うへなりとの後妻をいへる古言に 日本紀 卷二 媛妬の二字をうへなり移しと訓り。  
前妻と云る 兼平 宇波余利 日本紀 卷二 媛妬の二字をうへなり移しと訓り。  
室町家の比のうへなりや 相当打といへるや 後妻を離別し 後の妻をむらへるや  
其あつこかりて 前の妻あつてき女どもをたのめ 相当打を催し 前小後  
の妻の方へ使ひをほけりて 某の日某の時相当打よくべきやといひたり  
其日よのされば 前妻と云れぬとて あつて女どもをたのめ 相当打を催し 前小後  
をりて 後の妻の方へゆき 墓所より入て打まゐる 後の妻の方より 前小後妻  
女をたのめかきて うちをいひて うちをいひて うちをいひて うちをいひて うちをいひて  
の媒妁ぢり 者の妻と 待女郎小ありせと 双方の中より あつてひまなぐ  
あつてひまなぐ 待女郎小ありせと 双方の中より あつてひまなぐ

○さてお当打の名いふは 物の名いふなり。  
うへなり打の名いふは 物の名いふなり。

寶物集 卷二云 村上帝の宜耀殿の女御芳子と 小一條左大臣の御  
娘打殿とて ねりまんと 親と御覧と 餘小妬思けるわどに 九條  
右大臣師輔の女御と 土器の破りて 打給ひけるを 聞えとて 御兄  
の後原一條殿 伊弉河殿 兼通 三條殿 兼家 三人あつて 所打とま  
小成給ひ小つとて 聞えとて 増ての下の下子ども 後妻打とて

治承二年  
ふり今文  
化十年  
まじか  
六百三十  
六年

源平盛衰記 卷一云 村上帝の御宇 左中将兼家と云人あり 北方三人  
持たれ 異名よ 三妻雖と申けり 或時此三人の北方一所 寄合り 妬色  
頭とて 打合取合 髪をなぐり 衣引破り 見苦し 中將の  
穴六借とて 宿所を捨て 出給ぬ 取らる者あつて 三日まで 組合て 息つ















元氏披庭記を引く  
天魔舞のまを載たり

【その物語】

寛永十八年卯  
本吉花園藏

小云「我も長乃ころやひ。おま乃酒

よ小村ニちあつとりの人乃びせめり。これこひひて。あこらゆる小公乃の座を  
した花女ゆひーが。中畧。此花女男舞うがまこと名付て。うをみりく切折  
り。ゆよ結ふやまを指まこのは一箇のうと名付。今座をうさひ。ゆよ  
のなまれ。ゆよえ。顔色を双うて。袂をひる。取せよをやひを。えん人かを  
まごのせり。それをに。こひのう。諸酒乃花女とのあ。とま。び。一座の  
役者をとろく。率皇をま。花乃のほ。を打。一。祇。戸をま  
ま。を諸人よ。ん。云云。【河戸町のう。古画。う。わ。り。〇。は。の。巻。首。の。い。り。わ。  
ん。と。ま。の。あ。た。る。草。紙。五。十。二。冊。あり。云。思。老。田。女。な。れ。ゆ。び。文。を。披。ん。だ。ら。ん。入。り。が。  
あ。語。二。冊。あり。その。う。ひ。ひ。か。ら。ね。た。り。後。を。あ。り。たり。云。我。を。を。ひ。り。ひ。出。一。冊。う。げ。と。  
と。ま。ら。と。ろ。お。祭。と。名。付。らん。と。と。の。興。が。う。一。寛。永。拾。八。辛。巳。曆。三。月。中。旬。兩。板。と。  
われ。は。物。指。の。作。者。の。茶。の。長。の。時。を。て。た。か。う。ま。を。ま。の。う。り。ま。え。り。人。を。ま。ま。と。う。が。  
ら。れ。も。又。明。性。の。【京童】明暦四 卷一云「そのく。く。ま。と。り。ひ。出。雲。神。子。の。舞。  
ま。る。く。た。ま。り。也。この。こ。は。号。を。ま。ま。く。を。ま。ま。く。念。佛。あ。ら。り。て。後。

父のまゝとて男の装束もて哥筆をそれぞうたとゆひり。また是る

云云 東海道名所記

万治年 中印本

卷六云「むりしく京は歌舞妓のほ

まりりい出雲神子小あうつとまらりの。五糸れむがの橋づあり。そ  
か子をざりとのひみをりて。その後の社の東は舞臺とに  
らく念仏をらりよ哥をま。り。並。か。れ。あ。の。と。れ。ま。ま。と。い。見。鐘  
を首よりして。笛づま。小拍子を合せてをざりけり。その時ハ三味線はあ  
ざら。あ。て。三。十。郎。と。い。る。犯。玄。解。を。ま。ま。う。け。傳。助。と。り。ひ。の。を  
め。ら。ひ。て。三。糸。繩。の。東。の。う。に。祇。屋。の。町。の。う。り。ろ。よ。舞。臺。と。い。ふ。  
さ。め。く。よ。舞。を。ま。る。三。十。郎。が。犯。玄。傳。助。が。糸。づ。り。と。を。醒。云。の。う。り。の。  
これよりうらされてえおをる。あ。は。六。條。の。傾。城。町。より。佐。渡。嶋。と。い。ふ。の。  
醒。云。の。あ。終。は。佐。渡。嶋。正。吉。四。糸。川。原。よ。舞。臺。を。だ。て。け。い。の。数。多。出。て。  
と。の。り。う。き。女。の。ま。ま。う。り。【三。百。一。の。う。り。の。う。り。の。下。の。古。画。】は。い。く。つ。合。せ。の。京。童。の  
舞。を。ま。ま。う。り。云。云。【作者ハ中川春雲ナリ 罪謝家譜ハ貞室門喜雲中川氏ニ至







類聚国史  
の哥齋故  
の松屋夫  
又出で  
俳諧昇論  
のやま  
たり

東海道名所記

「三十郎が犯云傳女が糸よりとて系中られより  
 されてえぬむるやどに云云」とありて今案ども  
 昔は小出の札の文小いわく  
 哥齋故事始

延文月八日 於北野名古屋山左衛門の在所系捨女之  
 不作成之 一覽念望之人 類聚未見

如板小書て過こよ出せしとあるまじしとよりとらるる在不在女のいとせり  
 かがき信女とありひまがむべうんかかぎ信女といふは正徳享保のころか  
 人なり

又同書 卷一 哥齋故物志似名代のつらに系捨權三郎と云名をえたり

中 誹諧師紀逸 卷一 乃そりれの日記 小系鱗權三郎女形の始りたりあり

けいこり権三郎といふもの信女がけいこりをけいこり老をえられを  
 ありよ系鱗とせりしけいこり名をくあしとせりやとありけい

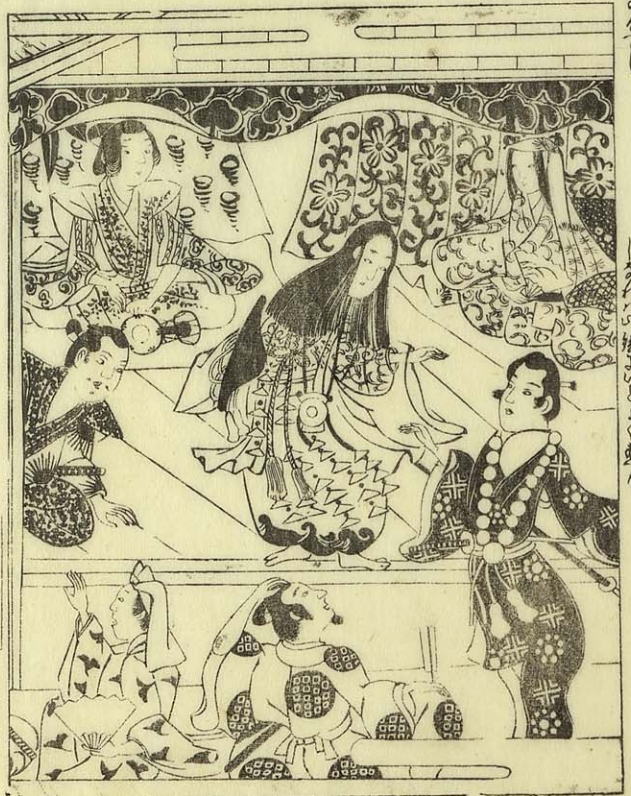






○かみ髪もて俗を香のり髪をとり。  
 かにかねんがつをとり俗をとり。

○かみ髪もて俗を香のり髪をとり。  
 かにかねんがつをとり俗をとり。  
 けり髪をよめるおの  
 こしみのをまこひ  
 見持をよめよりけり  
 云々といふは符合せ  
 けり髪をよめるおの  
 玉佩はゆきりの  
 あれともこしみのを  
 たれらるるゆめありし  
 あるべし。足袋はむら  
 さらよのうづれり。え  
 板の巻よらるるむら  
 さらばびらるる。茶童  
 小僧をよめるおの  
 合仏をよめるおの  
 ともはよめるおの  
 ○こし念珠をよめる  
 かいこ男はよめる  
 三十郎のあべ。  
 ○あべのよめるおの  
 茶童のあべをよめる  
 といふの真あり。



○茶童はよめるおの  
 小僧をよめるおの  
 合仏をよめるおの  
 ともはよめるおの

骨董上編 下之後十

かみ髪もて。

○かみ髪もて俗を香のり髪をとり。  
 かにかねんがつをとり俗をとり。  
 けり髪をよめるおの  
 こしみのをまこひ  
 見持をよめよりけり  
 云々といふは符合せ  
 けり髪をよめるおの  
 玉佩はゆきりの  
 あれともこしみのを  
 たれらるるゆめありし  
 あるべし。足袋はむら  
 さらよのうづれり。え  
 板の巻よらるるむら  
 さらばびらるる。茶童  
 小僧をよめるおの  
 合仏をよめるおの  
 ともはよめるおの  
 ○こし念珠をよめる  
 かいこ男はよめる  
 三十郎のあべ。  
 ○あべのよめるおの  
 茶童のあべをよめる  
 といふの真あり。

○かみ髪もて俗を香のり髪をとり。  
 かにかねんがつをとり俗をとり。  
 けり髪をよめるおの  
 こしみのをまこひ  
 見持をよめよりけり  
 云々といふは符合せ  
 けり髪をよめるおの  
 玉佩はゆきりの  
 あれともこしみのを  
 たれらるるゆめありし  
 あるべし。足袋はむら  
 さらよのうづれり。え  
 板の巻よらるるむら  
 さらばびらるる。茶童  
 小僧をよめるおの  
 合仏をよめるおの  
 ともはよめるおの  
 ○こし念珠をよめる  
 かいこ男はよめる  
 三十郎のあべ。  
 ○あべのよめるおの  
 茶童のあべをよめる  
 といふの真あり。



骨董上編 下之後十



















○比比女圖

られ今わづまもてほをさるるに  
とりつらひ原より比比女鬼と  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前

僧都追春秋七十六  
以寛仁元年六月十日  
寅時刻永遷化矣  
花ありは昏の僧都の  
滅後りつらひに二十  
五六十年をさる  
て長又中よ  
獲せり物多れば  
使とさるにたり  
續本朝往生傳十一  
元亨釈巻四  
乃も僧都の  
傳を載く入  
の年月日  
享年これにあらむ



骨董上編 下之後十五

寛仁元年より  
今文化十年まで  
は七九十七年と

○又鬼りとして見を  
ごりあるまればとる  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前

河内く鬼りてと云  
東酒及出雲迎死の長崎  
よと鬼とて云  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前  
りつらひ音ひふりめとつり前

○のちりも月令廣義 五卷の  
折鬼戯いさ小い  
鬼あり通雅 卷三の替鬼  
鬼の目わりおひとつり  
鬼といふ名あり和漢の似  
幸七



○られ古画よあらむ  
三國傳記の文の  
あひひきをあらむ  
とて今あらむ  
はるるのたの圖あり



















四ノハ二ホのまゝに上巻ももくろいでもうきあけり〇うつホの時代ハ詳ろくされ  
係氏よりさたの物とつれば棚よをきてりのうらひらくうきあけりてい。

田左日記 諸本より「中まざら」の小櫃の忍も云にとわれとる家卿本ト幽

附注本より「中まざら」の小櫃の忍も云にとわれとるを。権園主人イ中

まのぢ。上佐日記考證よめられたり。それも棚をかまてりのられる事のあらはれ

日記の買之ぬ。承平五年の紙行されびとらたれぬ。承平五年より今文化十年  
まごあうそ八百七十九年あり。

○中古見世棚と称へ證ハ庭訓往来よ云市町者通辻子小

路令構見世棚絹布之類贄菓子有賣買之便之様

可被相計也。時軒随筆卷二ノ庭訓ハ玄惠法印元欣四年  
正月廿一日登位とわれ見世棚とるも。

見世棚の名をえたり。勸進聖判職人哥合。天文六年よりを  
名を賣の花

の哥よ「妻ハ又とろも花の干本にえせむたるのをものいろく」  
の名受のまじり

奇異雜談集

天文中の作也  
考へ別より

卷二よ云「家ぬの婦人しりま

あ。二年ひとり中めあり。ほは茶座の本を居て茶をう。あひて







比叡の  
辟庭  
訓よ  
アと白  
古抄よ  
つばらこ

まつとをりつてくりに棚をほりて。胡瓦五六を叩てう醒。今今由八百醒  
のたひををまて  
うられよ似醒  
運歩色葉集  
天文十六十七の  
巻四見世棚の名をいふなり  
棚をまきけ此茄子

北條五代記  
ひららひふふ  
天正十八年の條よ云「扱又松原大の祓の宮のま  
登町十町あらは毎日市立て七條の棚を扱ふと力とる扱。扱買ありうり

とて。百の賣扱よの買扱有て。群衆也」又云「町人の小登をり。諸國津こ  
浦この名扱を扱來て賣買市をなつて。或い見世棚を扱まへ。唐土高藤

の祓物。京塚の絹布をうもあり云こ  
新市よ一の棚を扱ふとまこと狂言記「巻揚賣の祠五物つことうろくの祠と外狂  
言よのわりり」続狂言記「巻河原新市と云狂言」「けりかた承のまん市でさる。いつもの  
ていへばとてりにまわらふとせん。まけん。中畧。まのる。むらにこれとてさる。りりらとてを  
扱まやととのれがとせとのののをも扱まあへん。

清水物語  
寛永十五年刊  
上巻よ云「四條五條の辻よは扱とせとて。たまひとてよ  
ソツーさあぐの扱とを扱つめてあき。人の用次第よりありの此」

貞徳文集  
松の屋  
藏本  
下巻よ云「料紙商賣付多。見世棚て扱まは。白粉ひ云こ」

骨董上編  
下之後二上































者持云々 室町家のころは靴式をたし 鎌倉年中行事の行燈は續松一丁  
 行燈のつれ 村中れ者ども 稲麻竹葺と並居る云々 行燈のつれ  
 元禄三年の卯本 ちのころまきも田舎 行燈とまきありき 行燈のつれ  
 先板の巻ふ引 鹿野のちのころの 野向と同時 合せ考ふべし

○ 累解脱物語 卷下 行燈のつれ 再考 三十一

先板の巻ふ引 松の夜長物語と引てまきふたうのちやうちんとあり 魚鱗乃  
 誤めて綾ととりまき 挑灯あんとつれ 八お ありてれひきとまき 古印  
 本ハきふたうのちやうちんと 假名ふかけまき 後ハ古写本とるれば 魚鱗の  
 燈炉とあり されたり あり 證あり 燈炉とありてハ 挑灯の證ハありて  
 とのへけまきと上ふりて ごとくゆと 挑灯と燈炉ハひとつ物なれば 古印  
 本小ちやうちんとあり 後のさうらふわきまへ 〇さて魚鱗の挑  
 灯とつれハ 唐国の魚鮓灯の事 明の田汝成 西湖志餘 卷下 燈市

○ 古画行燈挑灯

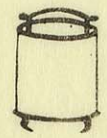
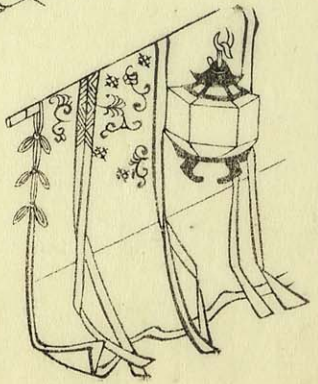
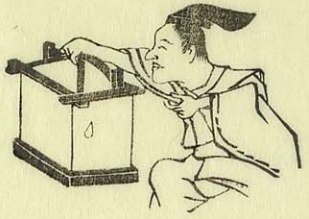
三十七

〇のちん挑灯とことろへん  
はたふひのものあり

〇これのちん挑灯とことろへん  
たし 證今茶人のちん挑灯  
露地あんどんとのへに古制の  
のこれのちん挑灯とことろへん



魚鱗



〇は二三  
あんどん  
ちん挑灯



骨董上編 下之後九



各色華燈中豪家富室則有料絲魚鮓云々とあるハ魚鮓

寶貨辨疑

ハ豪富のあつたれば得がきちたれ高價の物なり

ノ中ニ小魚鮓を載て價低きものハ成器難得とありて

爾雅釋魚の條下小魚枕の事詳之本草綱目十四魚鮓の條下小諸魚

の腦骨と鮓とありてあれは古ハ此小渡さき

升菴外集卷九中云江有青魚其

形似鯉而背青色又頭中骨黃拍之可以製器

河南通志卷三小云青魚出濟源

色正青云々枕如琥珀可以籠燈

林逸節用器財門小魚腦瑤之桂川地藏記

擗槐象牙引壺頗黎卮瑠璃壺云々

は多かり魚鮓を寶貨とす

○淮南子卷天文訓云月虛而魚腦減

王羲之蕪茶帖書記洞詮卷小云石首蕪食之消血成水此魚腦中有

石如棊子石ありて器はさきかひあり

○胡鬼板胡鬼子棊杖再考

羊中定例記正月十日... 胡鬼板胡鬼子棊杖再考

○手鞠 三十九

今の世ハ正月女のけりてあつて手鞠のはら... 慶利菟玖波の注釋ハ







○これハ文祿慶長のころに繪ある  
 時代の考へ別ふありむしハかくの  
 ころとほくはくしてしむるま  
 じりのひびきしてはく  
 ころのさむねゆきまか

天守閣



當時の画  
 袖口  
 襦袢

慶安二年の印本

尤之双紙上卷小ミト物

襦袢











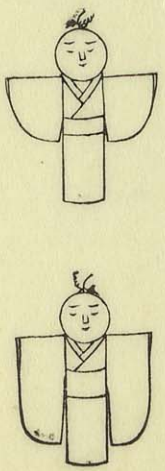




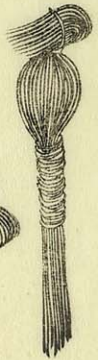
○ 追加 姫氏節供 髪葛子節供 [三十四]

今伊勢桑名に俗に女童れども八月朔日を姫氏の節供とて  
 ひらひら顔を書きべねるのをいりとりて頭へはげ木又竹の筒を  
 とし紙又縮みの衣服をきせひのか人形をはり棚ふす酒亦飯を  
 あてまつる又九月九日をわづら子の節供とて入ひのか草を  
 男女の頭へはくりこれも棚もあつてよく物をまてまつるとも前  
 りてよく此は秋の事ハ清少納言は草紙あんなえひのか草は  
 源三位頼政卿の父源仲正の哥にふれはりてふるき事あり按  
 はりみへ質朴ありて母天児母子なれば畧儀とて贖物のこ  
 まはるる古俗のなかりありて  
 ○ 和名 髪をいふ今のかりと古くはかぐとされはるかこの節供  
 らまゝ。後のひのあは此かぐの子の事のうけるあはな  
 ひのか草ついでひのかつていふはせれどおそあてまつる  
 ○ 此事ハ伊勢の桑名の公羽麻呂のゆかりひひおとせり此巻と  
 たかおのちかたをいふ人の質素のあつてはなまきのあはれは  
 のきのせり。龍の條に合せんべ

○ 八月朔日 姫氏雛圖



○ 九月九日 髪葛子圖



伊勢桑名  
 公羽麻呂寫真  
 骨董上編 下之後世五

〔樞陽部談〕卷十六 〔桑名〕  
 往吉郡 遠里小野の田圃より  
 所々市村の出を多ハ埋道  
 あり大さ鷲の卵の色  
 きらめて白くりしめて人の面  
 画かきそ 幼童の顔にわひた  
 黄色あつてあり 黄白もふ  
 美麗にたれて 豊き形と  
 以て「若」しとてり 此書ハ  
 元禄十四年印行せり  
 元禄十四年印行せり  
 ひめらのひのをりてあは  
 なる 龍のひめらのひの  
 引のせれハ 筆のほのた  
 とふ筆

○ 桑名  
 ひのか草を  
 わづら草と  
 いふぞ



○花むすびの考 ○唐土の鞆子ハ此の羽子れ子に似たる事 ○魚とさくらの再考  
 ○まうと灯笼の考 ○獨樂の考同古圖くまぐ ○梓硯寄絃口寄の考同  
 古圖 ○編笠の考古圖くまぐ ○端午れなごり花五月まりの考同古圖  
 ○宗任が梅花の哥の考 ○朝夷名が鶴の紋の考 ○膝の考 ○編木摺門説  
 經の考同古圖 ○放下僧さまりこあやめさあや竹の考同古圖 ○千駄櫃  
 の高人の古圖 ○せんと物賣の考同古圖 ○茶筌髪三里紙の考 ○女の髪  
 の風古圖くまぐ ○せんト物并ふ文字入の文様の考古圖くまぐ ○目黒の  
 ちら花の再考 ○いゝあいらふ ○棚機 ○牛馬 ○尻おひ比丘尼 ○踊  
 の古圖くまぐ ○蠟燭 ○若衆哥舞妓れ古圖 ○血屋敷の考 ○手管  
 りの詞のゆと ○椀久塚の考 ○同 ○社園棍女の肖像 ○支禪漆の  
 考 ○此外あまこわれとらゝゝ

追加 望 十句辨秘 辨秘のひやくありあけありとて下とて前取五 後取五 後取五 後取五  
 注せり。行年八十三なりきこぬかまふ。天文十九年の生れにまゝなり打のたふさる時をた。此外  
 うらなり打は 怨更のこたせさる。八やきりのふまこころ。あびてかそふ。又寛永十八年。帆亭  
 徳元が著せり。訓譜初學抄 多の類ふるなり打といふなり。訓譜家譜 仙臺比丘尼塚のふらて  
 ひくに法法ともわける。時鳥 松山致也とありこれびくの終ときをいつる。寛文五年の撰て  
 ○これを龍のそれの余ふ合せせんや。

江戸 醒齋老人 著 京傳

備書 島岡長盈  
 同 凡例目六下之卷末自 藍庭林信  
 刷人 井四紙至册六紙 名古屋治平  
 朝倉古次郎

加減朱子讀書丸

一包 一五五分 ●毒とんとはしに 和おやんてよく心賢のきとんて せきとん  
 はいふにわたりて心をつふ人ハおのづかづか 徳と下で天壽とととるよやく けよふ成用て 徳をせむる事  
 ●後いふならんて 益多一 一。 師のまひ。まや 狂そ所獲なり 江戸京橋南 山東老店  
 印章篆刻 ●玉石銅印古体近代体ゆゑあふ應せ。らよ石上刻一字  
 一次刻一字朱文七も白文五合大印ハ此限よりあり

骨董上編 下之後世六



東都書林

青山清吉

鴈金屋

小石川傳通院前